



京大広報

号外

2016.4

目次

〈卒業式・大学院学位授与式〉

卒業式における総長のことば……………	4602
大学院学位授与式における総長のことば……………	4605

〈大学の動き〉

平成27年度卒業式……………	4607
平成27年度大学院学位授与式……………	4608



平成27年度 卒業式

卒業式・大学院学位授与式

卒業式における総長のことば

平成28年3月24日

総長 山 極 壽 一

本日、京都大学を卒業される2,876名の皆さん、誠におめでとうございます。ご来賓の井村裕夫元総長、長尾 真元総長、名誉教授、列席の理事、副学長、学部長、部局長をはじめとする教職員一同とともに、皆さんのご卒業を心からお祝い申し上げます。あわせて、今日の卒業式を迎えるまでのご家族および関係者の皆様よりいただいた数々の厚いご支援に対し、心より御礼申し上げます。京都大学が1897年に創立され、1900年に第1回の卒業式を迎えて以来、119年にわたる京都大学の卒業生の数は皆さんを含めて202,725名になりました。

さて、皆さんは入学以来、どのような学生生活を送ってきたでしょうか。本日はぜひ、この数年間京都大学で過ごした日々のことを思い出してください。厳しい受験戦争を勝ち抜いて入学した皆さんは、京都大学にどんな期待や夢を抱いていたでしょうか。今日、卒業式を迎えるまでの数年間、それは叶えられたでしょうか。それとも、その夢は大きく変貌を遂げたのでしょうか。そして、皆さんがこれから歩んでいこうとされる道は、そのころの夢とどうつながっているのでしょうか。

私が京都大学で過ごした1970年代は、日本が大きく変わろうとしていた時代でした。入学した年には大阪で万国博覧会があり、世界の科学技術が競い合って展示され、新しい文明や宇宙への夢が大きく花開きました。同時に日米安保条約の改定をめぐって学生運動が過激な政治闘争へと発展し、内ゲバやテロなど悲惨な事件が多発しました。生協の食堂でテレビを見ているとき、三島由紀夫の割腹自殺を告げるニュースが画面に流れ、私は大きなショックを受けたことを覚えています。新しい時代が始まる予感はまだありませんでしたが、ある時代が終わったことを確信させる事件でした。私はそのとき、日本に、そして大学に学ぶべきものは残っているのだろ



うか、という疑問を心に抱いたのです。

あの時代、新しい知識を得る源泉は、映画と本でした。私が高校生のころ、卒業という映画が封切られ、大ヒットしていました。アメリカの大学を卒業したばかりのベンが故郷で再会した幼馴染のエレン。その母親との不倫とエレンとの恋の葛藤が、サイモンとガーファンクルの不思議なメロディーに乗って私たちの心に迫ってきます。ベンを拒否したエレンが別の男性と結婚式を挙げようとしているところに、ベンが飛び込んでいって、心を翻したエレンと駆け落ちをするシーンがエンディングなのですが、バスに飛び乗った二人を眺める老人たちの目が印象的です。世間の常識を破り、親と決別して新しい道を歩みだした彼らを待っているのは、冷たい伝統と倫理の壁なのか、それとも新しいものを受け入れる暖かい社会なのか。それを問いかけている映画だったと思います。それはまさに、日本の大学を卒業する学生たちにも共通する問題でした。

当時の学生のほとんどが読んでいた柴田 翔の「されどわれらが日々」という小説があります。東大生の主人公が古本屋でHという作家の全集に出会い、それが奇妙にからみついてくるような印象にとらわれたことから物語は始まります。古本屋の常連だった私も、同じような感情を抱いたことがあります。それは、その本の内容を知る以前に、本が私の手元に來たがっている、作者が紡いだ物語の世界が私に何かを見せたがっているような気分なのです。そして、本を開くと見ず知らずの誰かが書き込んだ傍線やメモ書きが目に入り、思いがけずその本と親しん

だ読者とめぐり合う。「されどわれらが日々」の主人公も購入したH全集に押してあった蔵書印から、付き合っている彼女や、政治運動をともにした仲間との関係を問い直し始めるのです。そのとき、真摯に心を吐露する方法は対話と、そして手紙でした。研究生生活に進んだ仲間が主人公に語った言葉があります。「ぼくは、一つだけ自分に課して守ろうとしていたことがある。それは、どんなに多くの人が賛成することでも、どんなにうまく形が整っていても、ただ、自分で考えてみて、隅から隅まで納得の行くこと以外は、何も決して信じまいということなんだ」。大学に入ってから、私は何度もこの言葉を反芻したことを覚えています。

柴田 翔と同年に歌人であり劇作家であった寺山修司がいます。「マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや」という歌に心を衝かれ、日本人としてのアイデンティティを改めて見つめなおした人々がそのころはたくさんおりました。私の学生時代、日本の風景は大きく変貌しました。あちこちでダム建設が始まって多くの村が水没し、住民たちは新しい土地へ移住を余儀なくされました。全国に高速道路やスーパー林道が建設されて山や森が分断され、造林政策によって広葉樹林は杉や檜の単層森へと変わっていきました。都市には新しい文化が溢れ、次々に多様な価値観が流れ込み、生まれる時代でした。そんな時に、寺山は「書を捨てよ、町へ出よう」という本を書いて、若者たちに常識や伝統を疑い、日々の生活の裏に隠されたさまざまな企みを見破ることを奨励しました。私も大学だけが学びの場ではなく、キャンパスの外にこれからの世界を色付けていく多様な兆候を読み取らねばならないと感じていました。

開学以来、京都大学は対話を根幹とした自由の学風を伝統としています。私もその伝統をじゅうぶんに活かしながら、時代の風を感じ取ってきました。私が目を開かれたのは、学問分野の壁を越えて話し合う数々の自主ゼミや研究会でした。そのなかで私は、多くの異なる考え方に出会い、違った世界の解

釈の仕方に耳を傾けました。そのころ手にした本の中で最も大きく心を揺さぶられたのは、伊谷純一郎の「ゴリラとピグミーの森」でした。独立前夜のアフリカに単身乗り込み、野生のゴリラを追って密林の奥まで自分の足で入っていく。その過程で著者は今までに見たことも聞いたこともない体験を積み重ねていきます。そこで問われるのは、日本という小さな国の文化ではなく、ゴリラと共通の祖先から進化した人間という生命体の存在と由来でした。自分は人間でありながら、その由来についてまだ何も確かなことを理解していない。その事実は大きな衝撃を私に与えました。しかも、恥ずかしいことに、その本の著者が私の所属する理学部の教員であることに私は初めて気がついたのです。すぐに私は伊谷先生に会いにいき、アフリカの原野に人間の由来を求めて思いをはせるようになったのです。それが私の人生の大きな転機となりました。

皆さんが京都大学で過ごした数年間も、世界は大きく変貌しました。入学前後に東日本大震災が起こり、放射能に汚染されて人間が居住できない地域が日本に出現しました。エネルギーに対する考え方と原発に支えられてきた豊かな暮らしについて、大きく見直しが求められるようになりました。環境汚染や地球温暖化による影響で、地球の利用できる資源が急速に劣化していることが明らかになり、人間の活動にさまざまな規制がかけられるようになりました。民族や宗教による対立が激化し、多くの難民が生み出されて、各国のこれまでの協力体制や連携にひずみが生じています。こういった社会や世界の急



速な動きのなかで、皆さんは何を考え、どういった決意を新たにしてきたのでしょうか。

知識を得る方法も、現代は私たちの時代と大きく異なります。それは1970年の万博で予測されていたことですが、情報機器の発達により、いつでもどこでも、簡単に既存の知識にアクセスできるようになりました。膨大な映像が情報機器を通じて無料で流され、もはや、本は知識を得る貴重な手段ではなくなりました。メールや携帯電話が主要な伝達の手段となり、手紙を書くことはめったになくなりました。しかし、対話だけはこころを伝え合い、議論を通じて新しい考えを生み出す手段として今も生き続けています。

今日卒業する皆さんも、これまでに京都大学を卒業した多くの先輩たちと同じように自由闊達な議論を味わってきたと思います。その議論と学友たちはこれからの皆さんの生きる世界においてきわめて貴重な財産になるでしょう。京都大学には創造の精神を尊ぶ伝統があります。まだ誰もやったことのない未知の境地を切り開くことこそが、京都大学の誇るべきチャレンジ精神です。今日卒業する皆さんのなかにもさまざまな突出する能力を身に着け、すでにそれを発揮して活躍している方が多いだろうと思います。京都大学で磨いた能力を示し、試す機会がこ

れからはきっと多くなることでしょう。しかし、忘れてはならないことは、自分と考えの違う人の意見をしっかりと聞くことです。しかも複数の人の意見を踏まえ、直面している課題に最終的に自分の判断を下して立ち向かうことが必要です。自分を支持してくれる人の意見ばかりを聞いていれば、やがては裸の王様になって判断が鈍ります。このとき、京都大学で培った「対話を根幹とした自由の学風」がきっと役に立つはずです。

京都大学は「地球社会の調和ある共存」を達成すべき大きなテーマとして掲げてきました。現代はこの調和が崩れ、多様な考えを持つ人々の共存が危うくなっている時代です。皆さんもこれから世界のあちこちでこのテーマに抵触する事態に出会うことでしょう。そのとき、京都大学の自由な討論の精神を発揮して、果敢に課題に向き合ってほしいと思います。皆さんがこれから示すふるまいや行動は、京都大学のOB、OGとして世間の注目を浴び、皆さんの後に続く在校生たちの指針となるでしょう。これから皆さんの進む道は大きく分かれていきます。しかし、将来それは再び交差することがあるはずです。そのときに、京都大学の卒業生として誇れる出会いをしていただけることを私は切に願っています。

本日は誠におめでとうございます。



大学院学位授与式における総長のことば

平成28年3月23日

総長 山 極 壽 一

本日、京都大学から修士の学位を授与される2,113名の皆さん、修士(専門職)の学位を授与される156名の皆さん、法務博士(専門職)の学位を授与される135名の皆さん、博士の学位を授与される592名の皆さん、誠におめでとうございます。

学位を授与される皆さんの中には、302名の留学生が含まれています。累計すると、京都大学が授与した修士号は74,355、修士号(専門職)は1,389、法務博士号(専門職)は1,859、博士号は42,556となります。列席の理事、副学長、研究科長、学館長、学舎長、教育部長、研究所長をはじめとする教職員一同とともに、皆さんの学位取得を心よりお祝い申し上げます。

京都大学が授与する修士号や博士号には、博士(文学)のように、それぞれの学問分野が付与されており、合計23種類もあります。これだけ多様な学問分野で皆さんが日夜切磋琢磨して能力を磨き、その高みへと上られたことを、私は心から誇りに思い、うれしく思います。本日の学位授与は皆さんのこれまでの努力の到達点であり、これからの人生の出発点でもあります。今日授けられた学位が、これから人生の道を切り開いていく上で大きな助けとなることを期待しています。私は総長に就任して以来、大学を社会や世界に開く窓として位置づけ、WINDOW構想を掲げてきました。大学に期待される教育、研究、社会貢献という三つの役割のうち、教育を大学全体の共通なミッションとし、有能な学生や若い研究者の能力を高め、それぞれの活躍の場へと送り出すことを全学の協力のもとに実施してきました。WINDOW構想の最初のWはWild and Wise、野生的で賢い能力の育成を目標にしています。世界の急激な動きに左右されることなく、独創的な考えを発信しながら、自分で判断し行動できる人を育てたいと思っています。これから社会に出て行く皆さんはぜひその模範となっていいただきたい。また、WINDOW構想では、女性の活躍を支援して希望の



ある社会を築くことを願い、男女共同参画推進アクションプランを提示しています。本日学位を授与された皆さんの中には、718名の女性が含まれています。この数は年々増えていくことでしょう。ぜひ、ご自身の経験と能力を活かしながら、男女が分け隔てなく、楽しく働ける社会の実現へ向けて、皆さんのご活躍を期待しています。

さて、本日学位を授与された論文の報告書に目を通してみると、京都大学らしい普遍的な現象に着目した多様で重厚な基礎研究が多いという印象とともに、近年の世界の動向を反映した内容が目に残ります。グローバル化にともなう異文化との交流、多文化共生、人の移動や物の流通、地球規模の気候変動や災害、社会の急激な変化にともなう法や経済の再考、心の病を含む多くの疾病に対する新しい治療法などです。ほとんどの研究テーマは私の属する学問分野の外にあって、私の理解力をはるかに超えているのですが、なかでも私の興味を引いた論文をいくつか挙げてみることにします。

たとえば、工学研究科の田中皓介さんの「公共事業を巡る報道と世論についての実践的社会科学的研究」は、戦後日本における公共事業を巡る新聞社説論調を定量的に分析し、年代を重ねるごとに批判的な論調が強まり、2000年代がそのピークで、2010年代には肯定的な論調が増えていることを指摘しています。その原因としては一般に言われているような上司からの指示や外部からの圧力と言うよりは、反感を招きにくい無難な記事を重宝し、多様性よりはわかりやすい記事を書く慣習の存在が挙げられています。地球環境学舎のSandra milena CARRASCO MANSILLAさんの「Post-disaster housing and resident-



initiated modifications -Spontaneous housing modifications in disaster-induced resettlement sites in Cagayan de Oro, Philippines 災害後の住宅再建と住民主導の増改築—フィリピン、カガヤンデオオロ市における災害後の再定住地区における自発的な増改築」は、2011年にワシ台風により甚大な被害を受けた同地区で実施された再定住プロジェクトについて、復興住宅建設のプロセス、住民による増改築の実態を調べ、行政主体の建設に加えてNGOの指導により増改築を実施することで耐久性、耐震性、耐風性を備えたレベルの高い増改築が実現できることを提言しています。アジア・アフリカ地域研究研究科の佐藤麻理絵さんの「現代中東における難民問題とイスラーム的NGO—難民ホスト国ヨルダンの研究」は、現在の中東が国民国家体制を採用することで、生態的・歴史的特質に合致しない擬制的な国家群を生み出したことが紛争や戦争による難民を増加させる結果となったことを指摘しています。その事実を踏まえ、今後の難民問題の対処には国際機関と当該国を補完する欧米系のNGOとイスラーム的なNGOのもつ、即応的対応力を活用するような有機的な連携の構築が必要なことを提言しています。論文博士(農学)の山端直人さんの「集落共同による獣害対策の多面的な効果に関する研究—ニホンザル被害対策としての集落による組織的な追い払い活動に着目して—」は、三重県内の農業集落を対象にしてサルの行動域調査や農家へのアンケート調査を行い、組織的なサルの追い払い状況を把握する三つの指標(対目撃追い払い率、農家参加率、予防的追い払い率)をもとに分析を行った結果、集落ぐるみの追い払いに継続的に取り組んだ集落のほう被害の軽減だけでなく、営農意識の向上や「集落の力」

の向上などに効果が得られることを指摘しています。また、人間・環境学研究科の株本千鶴さんの「「死にゆくこと」の現代の変容に関する社会学的研究—日本と韓国ホスピスの〈医療化〉を廻って—」は、欧米からホスピスケアを導入した両国で医療化の進展状況を、専門化、制度化、商業化という視点から分析しています。医療化がすでに起きている日本では医療者以外のケア従事者が不十分であり、初期段階にある韓国では非医療機関のホスピスケアを提供する従事者が多様です。両国が抱える共通の問題は、ホスピスケアに対する患者・家族のニーズが確認できないことであり、その原因の一つは自己決定や自律性の原則がないことだと指摘しています。これらの論文は現代世界で起こっている問題に鋭い分析のメスを入れ、その解決へ向けて提言を出すということで共通しています。未来へ向けての適切な道標となると思います。この他にも、タイトルをみただけでも中身を読んで詳しく内容を知りたいという気持ちをかき立てる論文や、私の理解能力を超えたたくさんすばらしい研究が学位論文として完成されており、私はその多様性に驚きの念を禁じえません。この多様性と創造性、先端性こそが、これからの世界を変える思想やイノベーションに結びついていくと確信しています。

研究とは今すぐに社会に役立つものばかりでなく、後の世で大きな力を発揮する可能性を秘めたものだと私は思います。大正末期から昭和にかけて琉球文化を研究した鎌倉芳太郎という人物がいます。香川県に生まれ、東京美術学校を卒業し、23歳で美術教師として沖縄にやってきた鎌倉は、沖縄の島々を精力的にめぐって膨大な史料を集め、記録をとり、写真を撮影しました。さらには60歳を迎えてから沖縄の伝統的な紅型、これは「ベニ」の「カタ」と書いて「ビンガタ」と読む、沖縄の伝統的な染めの技法ですが、その型絵染作家として創作活動を始め、74歳で人間国宝になっています。私が感動を覚えたのは、彼が執念のように収集した史料や写真が、第二次世界大戦で破壊された首里城の復元と琉球文化の復活に大きな力を発揮したことです。それは、鎌倉が首里の上層士族の家に下宿したことが発端となってい

ます。この旧家で気に入られて家族同然の暮らしをした鎌倉は、首里の言葉と文化を学び、それが後に首里の人々の胸襟を開いて貴重な史料の記録と撮影を可能にしたのです。灰燼と帰した首里城復活の声が上がったとき、鎌倉が大切に保存していたガラス乾板が首里城といくつも文化財を正確に伝えてくれたことが、首里の歴史と文化の見事な復元に結びついたのです。カメラを構えたとき、鎌倉は首里文化の復活に貢献しようとしていたわけではありません。また、その当時、首里の文化は日本本土の文化に圧倒され滅びようとしており、魅力を感じて研究しようとする内地の学者はほとんどいなかったのです。鎌倉が時流に乗ることなく、その目で見た首里の文化に憧れ、その美を追求し、それを保存しようと熱意を注いだことが、時代の荒波に翻弄されるなかで偶然にも大きな役割を演じることになったのです。研究とはまさにそのような、時代を超えて思わぬ価値を発揮するものだとは私は思います。鎌倉の生涯は、与那原恵氏の「首里城の坂道」という本になり、2014年に河合隼雄学芸賞を受賞しました。河合先生は京

都大学理学部に学び、長い間教育学部で教鞭をとられ、文化庁長官になられた方です。ユングの研究者として著名で、こころと文化を深く分析した論考を数多く残されています。与那原氏の受賞によって、この二人が出会い、その世界がつながったことを私はとてもうれしく思います。

ここに集った皆さんの学位論文も、将来また違った価値をもって賞賛されることがあるかもしれません。これから社会に出る皆さんや、研究の世界に残る皆さんの、これから歩む人生を、将来見つめなおしてくれる人が現れるかもしれません。皆さんの学位論文は、未来の世代へのこの上ない贈り物であり、皆さんの残す足跡は後に続く世代の目標となります。その価値は、皆さんが研究者としてのリテラシーを守れるかどうかにかかっていると思います。昨今は科学者の不正が相次ぎ、社会から厳しい批判の目が寄せられています。皆さんが京都大学で培った研究者としての誇りと経験を活かして、どうか光り輝く人生を歩んでください。

本日は誠におめでとうございます。

大学の動き

平成27年度卒業式

3月24日(木)午前10時から、京都市勧業館みやこめっせにおいて井村裕夫元総長、長尾 真元総長、中原俊隆名誉教授をはじめ、理事、副学長、部局長の出席のもとに平成27年度卒業式が挙行された。学歌斉唱に引き続き、山極壽一総長が各学部代表に学位記を授与した。

続いて総長の式辞があり、最後に全員で「蛍の光」を合唱して、午前10時33分に終了した。

新学士の内訳は右のとおりである。

学士

学位名	学位授与者数
学士(総合人間学)	129
学士(文学)	211
学士(教育学)	71
学士(法学)	319
学士(経済学)	257
学士(理学)	307
学士(医学)	106
学士(人間健康科学)	151
学士(薬学)	28
学士(薬科学)	52
学士(工学)	941
学士(農学)	304
合計	2,876

(教育推進・学生支援部)

平成27年度大学院学位授与式

3月23日(水)午後2時から、京都市勧業館みやこめっせにおいて理事、副学長、部局長の出席のもとに平成27年度大学院学位授与式が挙行された。

山極壽一総長が修士、修士(専門職)、法務博士(専

門職)、課程博士、論文博士の学位名に付記する各専攻分野の代表者に学位記を授与した。その後、総長の式辞があり、午後3時12分に終了した。

各学位授与者数の内訳は以下のとおりである。

修士

学位名	学位授与者数
修士(文学)	95
修士(教育学)	45
修士(法学)	17
修士(経済学)	37
修士(理学)	258
修士(医科学)	27
修士(人間健康科学)	58
修士(薬科学)	49
修士(工学)	700
修士(農学)	271
修士(人間・環境学)	134
修士(エネルギー科学)	123
修士(地域研究)	23
修士(情報学)	162
修士(生命科学)	78
修士(地球環境学)	36
合 計	2,113

修士(専門職)

学位名	学位授与者数
社会健康医学修士(専門職)	34
公共政策修士(専門職)	36
経営学修士(専門職)	86
合 計	156

法務博士(専門職)

学位名	学位授与者数
法務博士(専門職)	135

博士

学位名	学位授与者数								
	平成27年11月24日付け			平成28年1月25日付け			平成28年3月23日付け		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
博士(文学)	5	1	6	3	1	4	18	5	23
博士(教育学)	1		1				10		10
博士(法学)		1	1		1	1	10	2	12
博士(経済学)	3	1	4	1		1	8	2	10
博士(理学)	3		3	3		3	82	3	85
博士(医学)	8	3	11	9	3	12	79	4	83
博士(医科学)	1	1	2	1		1	8	1	9
博士(社会健康医学)							4	2	6
博士(人間健康科学)	1		1				6	1	7
博士(薬学)							10		10
博士(薬科学)							18		18
博士(工学)	5		5	7	4	11	80	10	90
博士(農学)	3	3	6		2	2	32	8	40
博士(人間・環境学)	3	1	4	2		2	32	2	34
博士(エネルギー科学)				1		1	12		12
博士(地域研究)	2		2	1		1	16		16
博士(情報学)	1		1	1		1	19		19
博士(生命科学)	1		1	1		1	8	1	9
博士(地球環境学)	2		2	2		2	6		6
合 計	39	11	50	32	11	43	458	41	499

(教育推進・学生支援部)